

宗祖弘法大師青葉祭祭文

敬うやまつて、真言教主大日如来金剛胎藏兩部界会諸尊聖衆、

殊ことには宗祖弘法大師、般若理趣等甚深妙典、総じては仏ぶつ眼所照一切三宝の境界に白して言さく。

夫れ惟そんみれば秘密曼荼の法門は現証仏果の直道にして密嚴仏国の大旆は濟世利人の標指たり。

斯の故に宗祖大師は大慈憐閔の皆を廻らし玉たまい、衆生の苦患を救い賜たまい、大悲の哀惋を催しては、閻浮加持の行法に勤しみ賜たまう。誠まことに是れ撰化衆生の妙行に非らずや。

茲ここに本日、秘教請來の宗祖弘法大師降誕の嘉辰こうたんを迎え、度みて東方山安養寺觀音堂を莊嚴し本尊觀世音菩薩宝前ほうぜんに香峯供物を献じ奉る。顧かえりみるに、宗祖弘法大師は天下の三筆あやまとうたわれ「弘法も筆の誤り」「弘法筆を選えらばず」といった諺ことわざすら生まれた書の達人なり。

大師は唐の留学を果たし終えられ帰国後に京都高雄の神護寺ごじに於いて中国伝來の密教を広めんとされているおり比叡

さいちようしやうにんでんぎやう

山を開創され日本天台密教の開祖 最澄上人伝教大師へ送

ふうしんじやう

られた手紙 「風信帖」は国宝となり、代々書道の手本となり

りんしよ

現代も臨書されている。

えんりやく

平安時代 延暦二十三年（八〇四）五月十二日、弘法大師

めい かんむ

三十一歳。待望の入唐留学の命が桓武天皇より下る。遣唐

かどのまろ

大使藤原葛野麻呂らと一緒に肥前国松浦の港より遣唐使船

第一船に乗り西海へ。出港して間もなく暴風圈に突入、木

の葉のように波間もさまよって船の転覆が覚悟されたおり大師

てんじん ちぎ

は百八十七ヶ所の国土の神、天神地祇に祈願され金剛般若

こんごうはんによ

どくじゆ

こうけん

経を書写し読誦す。その効験によるものか波風穏やかになり

ちやうけい

せきがんちん

苦難の末に八月上旬に唐は南の福州長溪県赤岸鎮に到着。

やうしゆう

そしゆう

本来、入唐する船は海路三千里を経て揚州か蘇州に着くも

ので、大師の上船の船は七百里を延長し南の福州まで流さ

かどのまろ

れる。早速、遣唐大使藤原葛野麻呂は上陸に必要な許可を

福州の長官へ文書にして求めるも、長官は一見して地に投げ

捨てる。「遣唐使」の照明が出来ず難民として疑われている。

そこで藤原の大使は、この窮状の救いを弘法大師さまの優れ

し文筆を書き以外にないと判断、遣唐大使に代って大師の書を

福州長官へ提出したところ今度は長官は感動して船の着岸を

認めたうえ、ちやうと長途の旅を慰勞し歡迎の言葉まで戴だいいている。
まさに弘法大師の書は異国いこくの人の心を動かし、大事だいじを果し
終え日本真言密教の成就までもたらした経緯けいゐと展開を億念
するものである。

当山では熊谷俊亮任職が大師信仰への教風恢宏の決意を
堅固にされ今年も四国巡拝連続三十九回を成し遂げられ、
来年四十回、四十周年の記念の佳節かせつを迎える。

俊亮任職は最愛の直子寺族夫人の七回忌法要を一月二
十一日に執り行われた。共に報恩謝徳の信心の道を血のにじ
む苦勞、有為の奥山さんざんを越えられ益々安養寺法域の灯火を
燦燦と照り輝やきわたそうと意欲もえに燃えておられる。仰ぎ願
わくば本日ご参詣の各家にこの功力勝計くりしょうけいを廻らし無比の加護
を給わらんことを。

重ねて乞う。

世界平和

万民豊楽

風雨順時

五穀豊饒

紹隆仏法

倍增法楽

檀越安穩 乃至法界 平等利益

だんえつあんのん

ないしほうかい

びょうどうりやく

平成二十九年五月二十一日

京都府向日市寺戸町

亀光庵住職 土口哲光敬白